歌枕〈姉歯の松〉の形成過程

広瀬朝光

一

歌枕で知られた姉歯の松は、宮城県栗原郡金成町字梨崎の地にある。松は、もとより代々植え継いだもので、樹齢は定かではないがかなり大きなものが数本あり、郷人に姉歯の松と呼ばれているのは、この中のどれなのかと尋ねては見たが、はかばかしい答えは返ってこなかった。松の傍らに、金成町教育委員会の立てた姉歯の松の解説を施した立て札があったので、それを書き写してきた。左の文面は、その解説である。

姉歯の松

「おくのほそ道」の松島から石巻へのコースの叙述の中に

十二日（「曾良日記」には、元禄二年五月十日条）平和泉と心ざしあねはの松・緒だえの橋など聞伝て、人跡稀に雉兎蒭蕘の往かふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて、石の巻といふ湊に出づ。

という一節がある。

芭蕉が心ひかれながら立ち寄ることのできなかった歌枕「姉歯の松」は、ここ栗原郡金成町字梨崎にある。この歌枕は「伊勢物語」（第十四段）にある。

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

の歌にもとづいている。また、この歌に「栗原の」と見えることから、「……紫の大明神の御前にて祈誓申させ給ひて、姉歯の松を見て栗原に着き給ふ。」（「義経記」）、「あこやの松やあねはの松人ならば都の旅に誘ふべきと……」（「小町草紙」）など、栗原の地を象徴するものとして使用されている。

この著名な歌枕には、伝承も多く生まれ、東下りの業平が、小野小町の妹、姉歯を訪ねてみちのくへ来たが、すでに没して墓に松が植えてあったという話（「義経記」）―地方的には気仙郡高田の長者の女、朝日姫が、宮仕えにのぼる途上梨崎の地で没したのを、妹の夕日姫がその墓に詣でて松を植えたという話―筑紫の松浦佐用姫が伊沢の水神のいけにえのため身を売ったが、神は孝心に賞でて受納しない。一方姉が妹の安否を気づかって、みちのくへ下ったが、梨崎の地で没する。佐用姫は姉の墓を訪ね、一寺を建立する。姉歯は姉墓の転訛であるという話などがある。

金成町教育委員会

右の解説は、歌枕〈姉歯の松〉が形成されて行く過程を知る上での文献学的暗示を与えている。「伊勢物語」の登場人物である在原業平、この業平と同世代の美女小野小町、その妹姉歯との結びつきが、陸奥に縁のある「義経記」を通じて語られている点に、この伝説の敷衍し

て行く源泉を見るのである。悲運の英雄源義経が姉歯の松と関連づけられている証(あかし)は、現在も梨崎の地に残る弁慶腰掛石、義経硯が池など、恐らくは後世に至り故事附けられたであろう名称が、あたかも「義経記」の昔を再現するかのように残存している事実である。義経伝説に関しては、『義経伝説と文学　全』（島津久基著・市古貞次解説・昭和10・1、大学堂書店）の大著があり、朝日姫・夕日姫伝説、松浦佐用姫伝説、猿丸太夫伝説（『民俗学辞典』柳田国男監修、昭和26・1、東京堂）などは、この姉歯の松の伝承に何等かの関連性を持っているといえよう。

ところで、姉歯の名称の起こりであるが、元来人名であり、小野小町の妹の名前であるという。小野小町に姉がいたらしい事実は、「古今和歌集」巻第十五恋歌五に、

あひしれりける人のやうやくかれがたになりけるあひだに、やけたるちの葉にふみをさしてつかはせりける　　こまちがあね

時すぎてかれ行くをののあさぢには今はおもひぞたえずもえける

の和歌があり、こまちがあねとはっきり記されているので、ほぼ間違いあるまい。しかしこの小町が姉と姉歯とを結び付ける文献学的資料は何もない。文献学的には「義経記」に載る小野小町の妹が姉歯という名前であり、後にこれが地名化するわけである。

猿丸太夫伝説によると、太夫は朝日長者の子で、小野姓を名乗り、下野二荒山の信仰と関連があるという。猿丸は二荒山の神の孫で、蜈蚣(むかで)の形を現わして攻めてきた赤城神を弓で射退けたと伝えられ、二荒山では女体山の神を朝日と呼び、神に仕える巫女の中にも朝日を名乗る者が多いとの由である。この朝日に対応するのが夕日であり、長者の栄華と没落の比喩として、屢々用いられる。二荒山の神主は小野氏で猿丸の子孫といわれ、諸国の神官で小野姓を名乗る者は多いという。岩手県陸前高田市には、その昔、玉山金山などもあり、長者伝説があっても一向におかしくもない土地柄であり、朝日姫・夕日姫伝説も、「義経記」に載る小野小町の妹姉歯の伝説から派生した説話であり、下野二荒山の信仰とも関連があるのかも知れない。玉山金山は陸前高田市竹駒町にあり、藤原三代の時代から著名であって、平泉の金色堂の建立も当山の産金によるものといわれ、竹駒明神の開創については行基勧請との社伝もあり、行基による天平産金説話、平泉との関連説話、平重盛の育王山献金説話、豊臣秀吉の経営説話など、様々な金山秘話を伝えている。朝日姫・夕日姫伝説発祥の地が陸前高田市である関係もあってか、市内には姉歯の橋の名称も残っている。

松浦佐用姫伝説は、貧しさのために人に売られた娘が、水神の生贄(いけにえ)として捧げられ、人柱となり水中に沈められる説話で、橋、堤の工事の際に人身御供として殺害される残酷物語である。この種の話は、東北各地に残っており、殺される娘の名前が佐用(さよ)という点で共通しているが、姉歯の松の伝承とはあまり関係がない模様である。

二

さて、歌枕〈姉歯の松〉が、初めて文献資料に顔を出すのは、「伊勢物語」第十四段においてである。

むかし、おとこ、みちの国にすゞろに行きいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにや覚えけん、せちに思へる心なんありける。さて、かの女、

中〳〵に恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれとや思ひけん、いきて寝にけり。夜深く出でにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、おとこ、京へなんまかるとて、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひ居りける。

この話は、在原業平がみちのくの栗原郡姉歯の辺の女と一夜を過ごした時の事柄である。都人と辺鄙なみちのくの片田舎の女との贈答歌は、都の歌人藤原清輔にも関心があったらしく、彼の手になる歌論書「奥義抄」にも、「夜も明けば」・「栗原の」二首を引いているが、いずれも「伊勢物語」に載る和歌とは若干の語句の相違があり、その点注目される。

「夜も明けば」の一首は、(1)「きつ」を狐とする、藤原清輔の「奥義抄」による説と、(2)「きつ」を方言と見做し、水槽の意味に取る江戸時代の国学者平田篤胤、近代の国語学者小林好日の説の二説があり、解釈の上で二義に分かれている。

三十九　わがやどのきつにはめなでくだかけのまだきになきてせなをやりける

きつとはきつねなり。かけとは鶏也。くだとは家をいふとぞものしれりし人は申し侍りしかど、はじめに宿とよみて又家の鳥といはむことといかゞ。もしくだはくづといへるにや。五音の字也。くづにはとりとよめるにやともきこゆ。(「奥義抄」上)

藤原清輔の解釈によると、「きつ」は狐の意とし、しかも和歌の初句を「わがやどの」と記しているのに、くだかけ(家の鳥)と詠むのはおかしいと難じてもいるので、或は「伊勢物語」に載るこの和歌の初句は「わがやどの」であって、後に「夜も明けば」と誰かの手により改竄(かいざん)されたのかも知れない。「きつ」を狐とする説は、「はめなで」を「食(は)めなで」、または「はめなん」と本文を訂正して、「狐に食わせてしまおう」と解釈するのである。

これに対して、「きつ」を東北方言と見做し、水槽の意に取る見方は、「はめなで」を「嵌めなで」(「なで」は完了助動詞「ぬ」の未然形「な」に打消の接続助詞「で」の付いたもの)とし、「はめないでおくべきか」とする説、或は「嵌めなむ」と本文を訂正して、「水槽にぶち込んでやろう」と解釈する説もある。江戸時代の秋田出身の国学者平田篤胤(安永五・八・二四〜天保一四・閏九・一一、一七七六〜一八四三)誕生以前に、「伊勢物語」第十四段について、東北方言説を指摘した人物として、仙台藩の儒者佐久間容軒源義和(洞巖)がいる。彼の著書『奥羽観蹟聞老志』巻之八栗原郡—姉歯松—には、「伊勢物語」第十四段の全文を掲げた後に、

按二前後二首及終篇詞皆所レ述三方言一而可下以視中往時郷語之実上矣又審下往時之人雖二里婦之賤一亦能做二風俗一詠二和歌一以述中其情上於レ是始テ

知下遺二国風于此歌一而王化之及二辺塞一在上玆也（下略）

右の文面を残し、方言について言及しているが、どの言葉が方言であるのか、またその言葉の意味についての解説がないために、単なる指摘のみで終っている。筆者は、この方言説が『奥羽観蹟聞老志』（享保四年己亥、一七一九）、次いで、佐藤信要著「封内名蹟志」（寛保元年十二月、一七四一）にも触れられている事実を指摘すると共に、また栗原郡金成町姉歯梨崎に住む農家の主婦によると、当地では「きつ」は水槽の意味ではなく、昔、農家で馬を飼っていた頃は、馬屋の近くに、藁や籾殻（もみがら）を入れる場所が在り、その入口は幅一間ほどの二本の柱で仕切られており、その二本の柱には溝が掘られ、その溝に板を嵌め込む様式（必要に応じて、板は何枚も用い、取り外しは自由な仕組みになっている。）になっていて、その場所を「きつ」と呼ぶとの話を紹介して置きたい。この解釈は、『竹取物語　伊勢物語　大和物語』（日本古典文学大系・岩波書店）の頭注・補注、並びに東条操編『全国方言辞典』（東京堂出版）の説明とは大いに異なるが、板を嵌め込む（藁や籾殻を置いている）様式の場所（物置）、即ち「きつ」に鶏を押し込めると解釈する方が、現実的で妥当なのではなかろうか。『全国方言辞典』によると、東北地方で、「きつ」或は「きっつ」を水槽の意に取る解釈はなく、「きつち」に水槽（岩手・秋田県仙北郡）の意味があるが、宮城県では、「きつ」・「きっち」・「きっつ」は、板蔵・櫃の意になっている。

藤原清輔は「奥義抄」において、「以下六首は伊勢物語歌也」と書き、三十七「いでゝいなば」（「伊勢物語」第三十九段）、三十八「山のみな」（「伊勢物語」第七十七段）、三十九「わがやどの」（「伊勢物語」第十四段）、四十「もゝとせに」（「伊勢物語」第六十三段）・「あふみなる」（同百二十段）、四十一「やましろの」（「伊勢物語」百二十二段）、四十二「みよしのゝ」（「伊勢物語」十段）など、六項目、合計七首の和歌について注釈を加えているが、この中の「いでゝいなば」・「わがやどの」・「あふみなる」・「やましろの」などの四首は、「伊勢物語」に載る和歌と、部分的に表現が異なっている。既に指摘した「わがやどの」一首も、その一例といえよう。

次いで、「栗原の」一首について触れてみよう。

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

「伊勢物語」に載るこの和歌の真意は、栗原にある姉歯の松が、もしも人間であるのならば、都への土産話がてら、さあ一緒に都へ参りましょうとお誘いしたいのですが、あなたではあまりに田舎臭くて連れていかれませんの意味を含んでいるのであろう。

この「栗原の」一首の類歌は、「古今和歌集」巻第二十　大歌所御歌の中の東哥、みちのくうたの項に見られる。

おぐろさきみつのこじまの人ならば宮このつとにいざといはましを

右の和歌は、上句（五七五）の初句・第二句、即ち「おぐろさきみつのこじまの」部分を「栗原のあねはの松の」と置き換えれば、「伊勢物語」に載る和歌と同一表現になる。この現象の説明には、「伊勢物語」と「古今和歌集」のどちらが先に成立して、他に影響を与えたかの問題をも内包するので、簡単には断じられない。栗原の姉歯（宮

城県栗原郡金成町沢辺梨崎）と小黒崎美豆小島（宮城県玉造郡岩出山町小黒崎）とは、ともに宮城県の県北に位置し、距離的にも隣接地域にあるので、第三句から第五句（五七七）の部分（人ならば宮このつとにいざといはましを）は、歌謡として歌われていたのかも知れない。

藤原清輔は「奥義抄」の中で、古今歌百十六首に注釈を施しているが、その百十二番目にをぐろさきの名が見える。

百十二　をぐろさきみつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを

これは小黒さきと云ふ所の名也。これがめでたき所なれば人にてあらましかば、都へぐしてのぼりなましとよめり。つととは万葉には裏とかきてよめり。つゝみもたる物と云ふ也。人なりともいかゞつゝみもつべき。されども田舎などより土産をもてきて人にみするをば、此たびのつとなりと云ふ心也。

小黒崎の美豆小島については、『奥羽観蹟聞老志』巻之八に、佐久間洞巌がその景観を紹介している。

美豆小島

同所去二小黒崎西南一四五町在二鍛冶沢東南玉造川中一丘山皆戴二青松一是乃小黒崎也。其下流有二一洲一々中有二高丘一高二丈余東西五六歩南北八九間丘上有二蒼松三株一河水縈二廻其下一翠色落レ陰急流潺々白沙芳草殆非二凡境一焉如二海島一兪故佗方誤而用二海浜之状一者多若二太上皇家隆之歌一可レ視郷党亦見下致二小島干海畔一之情上以称二美豆小島一蓋美豆乃為二見之訓一也。

「をぐろさき」の一首が著名なのは、この和歌が「古今和歌集」巻第二十　大歌所御歌に載せられているばかりではなく、美豆小島の地名の「みつ」に、掛詞として「水」・「見つ」・「三つ」の意味を掛けて、作歌できるという面白味が加わっていた事実も無視できないであろう。都の歌人達にとって見知らぬ陸奥の姉歯の松や美豆小島の辺の女性を、「都のつとにいざといはましを」と歌って誘うのも、大いに興味をそそる題材であったのに相違ない。

かくして、「栗原のあねはの松の」歌と、「おぐろさきみつのこじまの」歌とは、それぞれが本歌となって、後世の歌人達に和歌の題材を提供し、歌い継がれて行くのである。なお、小黒崎美豆小島は江合川の中洲に在り、この川は、その昔、玉造郡を流れるときには玉造川（或は玉造江）、荒雄村（現在の古川市）附近を流れるときには荒雄川と呼ばれていた。現在は古川市にある江合橋に因んで、江合川の名称に統一されている。

三

歌物語である「伊勢物語」に「栗原のあねはの松の」一首が詠まれてから以降、中古では伝奇物語である「宇津保物語」に、一首だけ姉歯の松を詠んだ和歌が見られる。

きく人はあねはの松の風なれやむかしのこゑを思出るは

（「宇津保物語」―初秋）

この歌は、「琴の音を聞いている人は、陸奥の姉歯の松のあたりに吹きつける風なのであろうか、昔この松の樹の下に葬った人の声（小

野小町の姉の姉歯を指すか）を思い出す私（平中納言正明）であることだなあ。」の意であろうか。この和歌の次に、小野小町めかして、

松風のむかしのこゑにきこゆるは八十嶋よりや吹きつたふ覧

と源中納言文正が歌を詠んでいるのは、小野小町は出羽の国司の娘で、彼女の死後、屍は八十島に埋めたという伝説があるからであろうか。

古今目録云小野小町者出羽国司女也云々数十年在京好色也。然而帰本国死去故屍在八十島歟小野者姓歟住所歟古今有小野姉其歌云

時過てかれゆく小野のあさちには今はおもひそ絶すもえける

（『奥羽観蹟聞老志』巻之八）

中世に入ると、姉歯の松の歌数もやや増して来て、「千五百番歌合」、「夫木和歌集」、紀行文「都のつと」などに、その名を見出せる。

千三百八十六番　左持　季能卿　右　丹後

栗原のあねはの松を誘ひても都はいつとしらぬ旅哉

哀なるすゞの篠屋の丸寝哉跡留むべき限とやはみし

凡て唯劣りと云で有ぬべしあねはの松もすゞの篠屋も

（「千五百番歌合」）

祐挙

かくはかり年つもりぬる我よりも姉はの松は老ぬらんかし

（「夫木和歌集」）

長明

ふる郷の人にかたらむ栗原や姉羽の松のうぐひすの声

（「夫木和歌集」）

能因法師

みちの国にてあねはのはしを

くちぬらんあねはの橋もあさな〳〵浦かせふきて寒き浜辺に

（「夫木和歌集」）

なさけおほき草木のかげには、言のはをかきあつめて、あねはの松にはあらねども、都のつととなづけ侍りぬ

宗久

貞治六年春

元来、本歌である「栗原のあねはの松の」一首は、初句・二句による音数律（五七）の限定化、それに「都のつと」といった固定観念が加わるために、歌人にとっては変化を施しづらい題材であったろう。季能卿の歌は、本歌の典型的な本歌取であって新鮮味がなく、祐挙の歌は暗い印象を与える。長明と能因の歌は奇をてらった感じがあり、現実離れしている。能因の歌は、海浜の情景を詠んでいるので、金成町姉歯梨崎の地の実景とは無関係であり、或は陸前高田にある姉歯橋を指しているのか、その点も不明確といえる。宗久の紀行文、「都のつと」は、姉歯の松の本歌にあやかって名付けられた書名であり、謡曲や狂言にも、これに類する例が多い。

在原業平と小野小町、その妹の姉歯と栗原のあねはの松とが結びつくのは、文献学的には「義経記」が最初である。

あいかはの津に著かせ給ひて、道は又二つ候。最上郡にかゝりて、伊奈の関を越えて、宮城野の原、榴の岡、千賀の塩釜、松島など申す名所〳〵を見給ひては、三日、横道にて候。それよりのちさうたう、亀割山を越えては、むかし出羽の郡司が娘小野の小町と申

す者の住み候ひける玉造、室の里と申すところ、又小町が関寺に候ひける時、業平の中将東へ下り給ひけるに、妹の姉歯が許へ文書きて言伝しに、中将下り給ひて、姉歯を尋ね給へば、空しくなりて、年久しくなりぬと申せば、「姉歯が標はなきか」と仰せられければ、ある人「墓に植へたる松をこそ姉歯の松とは申し候へ」と申しければ、中将姉歯が墓に行きて、松の下に文を埋めて読み給ひける歌、

栗原や姉歯の松の人ならば都の土産にいざと言はましものを

と詠み給ひける名木を御覧じては、松山一つだにも超えつれば、秀衡の館は近く候。理に枉げてこの道にかゝらせ給ふべし。

（「義経記」巻第七）

「義経記」巻第七によれば、義経主従は合川の津（羽前国最上郡矢向村本合海、今は新庄市の内）から亀割山（羽前最上郡船形村の北、現在は最上町に属する、標高五九四米）を経て、せひの内（瀬見温泉附近か）で一泊し、翌日栗原寺（陸前国栗原郡栗原村）に着き、それから姉歯を経て平泉へと向っている。この記述の中に昔話があり、小野小町が近江国の逢坂山の関寺にいる頃、在原業平は東国に下向し、小町の妹姉歯を玉造郡の室の里（現在の宮城県古川市か。）に訪れたところ、既に死んでいて、墓に植えた松こそ姉歯の松であるといわれ、「栗原や姉歯の松の人ならば都の土産にいざと言はましものを」の一首を詠んだというのである。かくして、歌枕姉歯の松は、業平・小町伝説に加えて、義経伝説とも融合し、旅をする武士や商人、修験者達の手により、各地に伝説が喧伝されて行くのである。

日数つもればみちのくの、しのぶの里に程近し。都をば、霞と共に出でしかぞ、けふ白川の関にも著きにけり。げにや命ほど、つれなきものはよもあらじ。遠き東の旅衣、きつつや怨むるかひもなし。都にて身の昔をみちのくや、しのぶの山のしのぶずり、袖にもうつしとゞめばやと、宮城野の小萩が花の、むらずゝき、なびく煙は塩釜の、八十島かけて千賀の浦波、安積の沼のかつみ草、緒絶の橋や阿武隈川の、わたりしてゆきみの里の程近し。はなかの桜たけくまの、松の木立もみきと聞く、あこやの松やあねはの松人ならば、都の旅に誘ふべきと、よみし歌の枕をせめて、筆にうつしても、見ばやと思ひし言の葉の、今は目に見ることのうれしけれども、いたづらに、歌枕、よむとても、誰か小町が歌とて、もてあそぶ人もなし。（「小町草紙」）

高砂住吉辛崎や、都の富士も東ぞと、三保の松原栗原や、姉歯の松の人ならば、都の苞に誘ひなん、あはれ阿古屋の松風の、名高きや上なかるらん。（「阿古屋松」）

名所は都に聞えたる、安積の沼にはかつみぐさ、信夫の里には文字摺石、思う人には引かでみせばや、姉歯の松の一枝。塩釜浦わに雲はれて、誰も月をば松島。いとどさみしき秋の暮に、月出ずるまでひまなきを、いざさしおいて休まん、いざさしおいて休まん。（「小名狂言」）

弁慶「その時弁慶表に進み。いかに土佐坊たしかに聞け。さても書きつる虚起請の。罰を忽ち与ふべし。いざ一太刀と呼ばはれば。姉歯「大将討たせて叶はじと。好む打物ひつさげて。弁慶を目懸けて懸りければ。弁慶「天晴器量の仁体かな。さて汝は誰そと尋ぬれ

ば。姉歯「ものその物にあらねども。正尊が内に名を得たる。陸奥の国の住人に。姉歯の平次光景なりと。大音上げてぞ名乗りける。（「正尊」）

中世の軍記物「義経記」や御伽草子「小町草紙」、或は謡曲「阿古屋松」、狂言「小名狂言」などには、姉歯の松が既に名所歌枕として人口に膾炙（かいしゃ）している有様が感じられ、「伊勢物語」第十四段に載る本歌の影響が、文芸の各分野に亘っている事実を知るのである。謡曲「正尊」では、弁慶と姉歯平次光景との問答があり、義経主従の伝説と姉歯の地名とが結びついて、人名と化している点に注目すべきである。これは伝説が、その土地に定着して普遍化して行く過程を示しており、中世以降、近世にかけて、在原業平や小野小町、その妹姉歯、或は義経主従の伝説に類型的な物語が付加される。朝日姫・夕日姫伝説、松浦佐用姫伝説などは、いずれも姉妹の愛情を描いた美談で、姉の死後、妹がその墓を訪れる物語である。この二話は、近世中期の『奥羽観蹟聞老志』（佐久間洞巌、享保四年、一七一九）、「封内名蹟志」（佐藤信要、寛保元年、一七四一）、「東遊雑記」（古川古松軒、寛政元年、一七八九）の三著に、その概略が載っているので、話の大筋は把めよう。

姉歯松

去二沢辺一東一十二町余在二梨崎村一有二長松樹一是也古松乃四十余年前枯

稿其松五葉　後人継而所レ植新松也古老相伝是乃筑紫肥前産松浦佐用姫者之姉某墓上松也哉曰小野小町姉往昔有レ寺号二松語山龕蔵寺一是乃妹子為二亡姉一所レ建精舎也

（『奥羽観蹟聞老志』）

姉歯松

郷説に、用明帝の朝に、美婦を京師に献ず。気仙郡高田より献ずる所の美女、不幸にして路上病に罹りて、此の村落に死せり。郷人憐みて此地に葬り、松を植てしるしとせり。其妹容色又姉に勝れり、重て是を京都に召連しかば、上京の時此地にて、亡姉の墓を見て悲みに堪ず、涕泣して去れり。後姉歯に改む。一説、小野小町の姉此所に没せしを、小町亡姉の為に寺を建、松語山龕蔵寺といふと云り。（「封内名蹟志」）

世に知る姉歯の松は姉歯村と言ふにあり。つくも橋より凡一里、南北に相対せり。言伝ふ、用明天皇の御時に是より奥何某の女に美人有て都へ召さる。此所にてやまひに伏して死す。里人哀れみて山中に葬る。其後又妹をめさる。此所に来り姉の墳に詣ふでつかしるしの松を植る。土人是を姉墳松と称す。古木にて、幾度も枯れてうへつぎし松ながら一抱へ斗り有雅なる松二本あり。今村の名に書は姉羽村と記す。墳の字を忌しものなるべし。松の傍に義経腰掛石あり。予地理を見るに、此筋古しへの古道ならんか。今往来せる街道は昔時は沼にても有て、其沼をよけて勝手よき方へ往来せしと思はれ、つくも橋の掛りし所、また此道筋もむかしの古道なるべし。

かくばかり年つもりぬる我よりも姉羽の松の老ぬらんかし　資隆

古郷の人に語らん栗原や姉羽の松の鶯のこゑ　用明天皇御製

此二首は案内者の覚へ書に有りしを写す。解しがたきうた也。

古松軒

みちのくの姉羽の松は誰ゆへにいろかへすして世をやふるらん

（「東遊雑記」）

松浦佐用姫伝説は、『奥羽観蹟聞老志』に書かれており、朝日姫・夕日姫伝説は「封内名蹟志」に詳しく、小野小町の姉の死に関しては、この二著に言及してはいるものの、「東遊雑記」では、美人の姉妹の名を記してはいない。十八世紀の三著に共通する事項は、姉の死後、墓の上に松が植えられ、妹が姉の墓を詣でる点である。この点を顧慮してみると、「義経記」に伝える小野小町の妹、姉歯とあるのは、姉の書き間違いではないかとも推察される。これは「古今和歌集」巻第十五恋歌五に載るこまちがあねの記録と併せて、再考すべき事柄でもある。なお、「東遊雑記」の引用和歌並びに歌人名には記述上の間違いがあり、また問題点をも内包している。

祐挙

かくばかり年積りぬる我よりもあねはの松はおいぬらむかし

（「夫木和歌抄」巻第二十九　松）

この歌は伊勢へくだりけるに大ののはらのすゝきわけゆけばすゑに橋あり名をみだればしと云ふと云々

鴨長明

ふるさとの人にかたらむくり原やあねはの松の鶯のこゑ

（「夫木和歌抄」巻第二十二　原）

右の引用和歌と歌人名が正しいのであるが、「ふるさとの」一首は詞書を読むと判明するように、鴨長明が都から伊勢へ下って行ったときに詠んだもので、第三句・第四句の「くり原やあねはの松の」と歌われている地名は、陸奥の栗原郡沢辺梨崎とは異なる場所であるらしい。一考を要すべき点である。

近世に入ってから、松尾芭蕉が元禄二年（一六八九）に奥の細道の旅に出て、平泉を訪れたのはあまりにも有名な話であるが、彼の紀行文「奥の細道」には、

十二日、平和泉と心ざし、あねはの松・緒絶えの橋など聞き伝へて、人跡稀に、雉兎蒭蕘の往きかふ道、そことも分かず。終に道踏みたがへて、石の巻といふ湊に出づ。

……

南部道遙かに見やりて、岩手の里に泊る。小黒崎・みつの小嶋を過ぎて、鳴子の湯より尿前の関にかゝりて、出羽の国に越えんとす。

とあり、曾良の随行日記を参照すると、芭蕉は石巻から北上川沿いに北上し、鹿又、飯野川、柳津（現、津山町）、登米、上沼、涌津・金沢（現、花泉町内）、一関を経て、五月十三日に平泉へ到着している。帰途は一関から三迫、岩崎、真坂（現、一迫町）、岩出山、宮、鍛冶谷沢・名生定（現、鳴子町内）、尿前を経由したために、芭蕉は姉歯の松を見る機会を得なかったが、小黒崎美豆の小島には羽前街道筋であるために立寄れたのである。近世の和歌としては、加藤枝直の「あづまうた」（享和元年、一八〇一）、加納諸平の「柿園詠草」（嘉永六年、一八五三）、橘守部の「橘守部歌集」（安政元年、一八五四）などに、各一首宛姉歯の松を詠んだ歌を見出せる。

姉のみちのくへまかるとてやがて帰らむといひて年月ふれど帰ら

ざりけるを恨むる妹に代りてよめる

塩釜の恨みけりとも知らずしてあねはの松の千代を待てとや

（「あづまうた」巻六　雑歌）

寄　松　恋

さよ深くいでし心の奥みえてあねはの松に秋風ぞふく

（「柿園詠草」）

もろともに君も千代ませみちのくのあねはの松をはらからにして

（「橘守部歌集」雑歌）

右の三首は、いずれも姉妹の愛情を歌ったものであるが、本歌の影響の跡があまり感じられないところに、やや新鮮味がある。「塩釜の」・「もろともに」の各一首は、千代の言葉の使い方に面白味があり、前者には姉との再会を待ち望む妹の願いが込められており、後者には兄弟姉妹がいつまでも健やかに、お互い長生きをするようにとの意を帯している。「さよ深く」の一首は、秋風に苦心の跡を見出せるが、「宇津保物語」第十一巻初秋に載る「きく人はあねはの松の風なれやむかしのこゑを思出るは」の和歌の心を踏んでいるように見受けられる。

四

「栗原のあねはの松の」歌は、「伊勢物語」から「義経記」を経て、御伽草子の「小町草紙」、謡曲、狂言などにも引用され、伝奇的要素を加えながらも主として歌物語の世界で活用されて来た。これに対して「をぐろさきみつの小島の」歌は、本歌が「古今和歌集」にあるためか、主として和歌の世界で、しかも帝を中心とする堂上方の身分の高い人々により中古から中世にかけて詠み継がれた様子である。「古今和歌集」巻第二十　大歌所御歌に載る「をぐろさきみつのこじまの人ならば宮このつとにいざとはいはましを」の和歌は、詠法上(1)「をぐろさきみつのこじまの」、(2)「みつのこじまの」、(3)「小黒崎ぬまのねぬなは」の三つに分けて説明する方がわかり易いので、これ以下この方法に従って論述する。

(1)「をぐろさきみつのこじま」七首

をぐろさきみつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを

（「古今和歌集」巻第二十　大歌所御歌）

家　隆

をぐろさきみつの小島の夕霧に棚無し小舟行方知らずも

（「壬二集」中　四季之部）

宝治二年百首歌に島鶴　太上天皇

をぐろさきみつの小島にあさりするたづぞ鳴くなる波立つらしも

（「続古今和歌集」巻第十八　雑歌　中）

読人しらず

をぐろ崎みつの小島にすまばこそ都のつとに人もさそはめ

（「夫木和歌集」巻第二十三　島）

従二位　家　隆

壬二集

をぐろさきみつのこじまの夕霧に棚なし小舟行方しらずも

（右　同）

弁　内　侍

心ありてなくにはあらじをぐろ崎みつの小島のたづのもろ声

（右　同）

右の六首に見える小黒崎美豆小島は地名であり、都を遙かに隔てたみちのくの土地であるがゆえに、「みつ」には「三つ」・「見つ」（「見ず」の意も含むか）・「水」の意が掛詞として懸っていると推察され、実際に現地を見たことのない都人にとって、未知の土地の出来事にいろ〳〵と想像をめぐらして和歌を詠むことは無上の喜びでもあったろう。読人知らずの和歌を除いて、他の和歌には本歌の影響が見られず、歌人が新しい題材を求めて詠法に新境地を開こうとする意欲が目につくのである。ただ、「をぐろさきみつのこじまの」、或は「をぐろさきみつのこじまに」と三十一文字の和歌の中で、二句に亘って十二文字の音数律を割かねばならぬこの詠法は、変化を求めづらいのか次第に廃れて行き、「夫木和歌集」以降、近世にかけてはわずか一首を見るのみである。

島　花　　八田知紀

みやこ人つとはといはば小黒崎みつの小島の花をかたらむ

（「しのぶぐさ」二編　下巻　春歌）

この和歌にも、本歌の影響の跡（「つと」土産の意）が見え、斬新さといえば、「みつの小島の花」ぐらいであろうか。

(2)「みつのこじまの」五首

島　螢　　家　隆

螢とぶみつの小島の旅人は都を恋ふる玉やうくらむ

（「壬二集」上之下　詠百首和歌）

百首御歌中に　　順徳院御歌

人ならぬ岩木もさらに悲しきはみつのこじまの秋の夕暮

（「続古今和歌集」巻第十七　雑歌　上）

百首歌よみ侍りける中に　　光明峯寺入道前摂政大臣

さそふべきみつの小島の人もなしひとりぞ帰るみやこ恋ひつゝ

（「新後撰和歌集」巻第八　羇旅歌）

百首歌よみ侍りし中に　　中務卿尊良親王

いざとだに言ふ人なくて数ならぬみつの小島の松は古りにき

（「新葉和歌集」巻第十七　雑歌　中）

島　春　曙　　八田知紀

ふたつなき都のつとに眺めおがむみつの小島の春の曙

（「しのぶぐさ」三編　春部）

既に指摘したごとく、「をぐろさきみつのこじまの」では、音数律（五七）の面での制約が厳しいために、「をぐろさき」の地名を省略し、若干の言葉の自由を得ようと試みたのが、この「みつのこじまの」歌であったろう。家隆の歌には、題材を島螢とし、螢の飛び交う有様の表現として、まるで玉が浮いているようだと語り、夜空にも青い光を放って飛ぶ螢の美しさを的確に描写しているのであり、その詠法は前代の和歌には無い題材を扱いながらも、本歌の姿をも匂わせており、「旅人」・「都を恋ふる」などの語句を用いる手法により、古代の情緒をも漂わせている。順徳院御歌は「人ならぬ岩木もさらに」と在来の詠法で歌いながら、川辺における秋の夕暮の閑寂さを表現するのに成功している。「さそふべき」・「いざとだに」の二首は、古歌を

追懐しながらも、現実的に都に連れて行くような女性にめぐり会えぬもどかしさを嘆いている歌である。「ふたつなき」の一首は、近世の叙景歌で、本歌の影響を受けている平凡な歌である。この五首は、音数律についていえば歌人達にかなり自由に歌える余地を与えはしたものの、名所歌枕の見地からは、地名である小黒崎を省略した関係上、どこの「みつのこじまの」歌であるのかわからなくなるという欠陥も生じる結果となり、あまり流行らなかったらしい。

(3)「小黒崎ぬまのねぬなは」他、五首

左京大夫経忠の八条の家にてかはづをよめる　源　俊頼

をぐろさきぬたのねぬなは踏みしだきひもゆふましに蛙鳴くなり

（「散木奇歌集」第二　夏部）　俊頼朝臣

散木奇歌集

をぐろ崎ゐなのねぬなは踏みしだきひもゆふまゝに蛙鳴くなむ

（「夫木和歌抄」巻第八　夏雑）　俊頼朝臣

小黒崎あさきとだえのみをつくし立てる姿もふりぬとはみよ

（「夫木和歌抄」巻第二十六　崎）　光俊朝臣

小黒崎ぬまのねぬなは苦るしきにこのよにしける心なりけり

（右　同）　俊頼朝臣

小黒崎ぬまのねぬなはふみしだき日もゆふましに蛙鳴くなり

（右　同）

俊頼の歌には、三首の重複歌がある。「ぬま（沼）」、「ぬた（沼地）」、「ゐな（田舎）」、「ねぬな（根蓴菜＝じゅんさいの古名）」の意味が判明すれば、歌の大意は「小黒崎の沼地にあるじゅん菜は踏みつけられてしまい、夕暮になると蛙の鳴き声が聞こえて来ることだなあ。」ということで、一般に和歌の題材としてはあまり用いられない「ねぬな」・「かはづ」の言葉が使用されている点に着目したい。同様に「あさきとだえのみをつくし」（しばらく御無沙汰した川の杭）も、変った趣向の歌である。歌の意味は、「小黒崎にもしばらく御無沙汰しているが、川の杭が川面に立っている姿も、きっと身を使い果たして古びているだろうが、まあ見てごらんなさい。」というのであろうか。他の人が注目しない「みをつくし」（澪標、通行する船に通り易い水脈を知らせるために立てた杭、「身を尽し」の意が懸詞となっている。）に眼を向けるなど、俊頼の歌風は他の歌人とは異なっており、独自の境地を示してはいるものの、他へ影響を与えるほどではなく、「ねぬな」・「みをつくし」の二語は、小黒崎に関していえば、後世の歌人の誰もがこれを用いていない。

五

歌枕〈姉歯の松〉と歌枕〈小黒崎〉とは、本歌の初句・第二句（五七）を除き、第三句・第四句・第五句（五七七）の語句「……人ならば都のつとにいざといはましを」を同じくする。両地域は宮城県の県北の栗原郡・玉造郡に属し、姉歯の松と小黒崎美豆小島の距離も至近であり、前者は陸前高田に行く古の街道筋に当っており、後者は古

川・鳴子を経て出羽に赴く羽前街道の道筋にある。古来、数多くの旅人達が、この街道を往来したであろう。そして、旅人達は栗原郡・玉造郡にまたがる歌謡を口ずさみ、五七七の上の二句に適当な言葉を挿入して、声高らかに歌い、笑いながら旅を続けたのかも知れない。その中にこの歌謡が、旅人達の口から口へと伝わり、いつしか都の歌人達の耳に入り、〈姉歯の松〉は、旅の歌人在原業平と小野小町の姉の姉歯と結びついて「伊勢物語」に引歌として、郡名・地名を含めて挿入され、〈小黒崎〉は地名・地形を明確にした形で、「古今和歌集」巻第二十　大歌所御歌の部立に、東哥、みちのくうたとして記載された。これ以降、二つの歌枕は、全く別個の和歌として区別され、それぞれが別の道を歩むのである。

歌枕〈姉歯の松〉は、歌物語の「伊勢物語」に載り、業平・小町の伝説と結びついて軍記物「義経記」にその内容が紹介されてから、余計以前にも増して著名になり、御伽草子、謡曲、狂言など、主として語り物系の文献にその名が引用されている。

一方、歌枕〈小黒崎〉は、勅撰和歌集の「古今和歌集」にその本歌が載せられているせいか、天皇や堂上方の高位の身分の人々によって歌に詠まれており、語り物に見られるような庶民的な色彩は薄く、わずかに近世に至り、井原西鶴が浮世草子「一目玉鉾」(元禄二年)に、

○小黒崎

をぐろ崎三つの小嶋の人ならは都のつとにいさといはまし

○美豆小嶋

人ならぬ岩木も更にかなしきはみつの小嶋の秋の夕くれ

右の二首を証歌として紹介しているにとどまる。この二首とても、「古今和歌集」巻第二十　大歌所御歌と「続古今和歌集」巻第十七の順徳院御歌であり、本来的に歌枕〈小黒崎〉は、和歌の世界において、中古・中世に栄え、堂上方の没落、戦国の世の戦乱の巷の中に、やがて消え行く命運にあり、滅びの光にすぎなかったのである。

(昭和61・3・30)